

非現実的な楽観傾向は本当に適応的といえるか³

——「抑圧型」における楽観傾向の問題点について——

安 田 朝 子¹ 佐 藤 徳²

Taylor (1989) は、自己報酬的なバイアスは精神的健康や適応と結びついていると主張している。しかし、それは本当だろうか。自己報告式の尺度のみによって健常者を抽出すると、「抑圧型」のような過度に肯定的なバイアスを示す群がそこに混入するため、結果が大きく歪む危険性がある。しかし、「抑圧型」は身体疾患の罹病率が高く、必ずしも健康であるとは言い難い。「抑圧型」は、特性不安尺度の低得点者かつ Marlowe-Crowne 社会的望ましき尺度の高得点者と操作的に定義される。他方、「真の低不安群」は両尺度の低得点者である。研究 1 では、過度に肯定的な自己評価傾向および非現実的な楽観傾向は「抑圧型」において顕著であり、「真の低不安群」はそれほど楽観的ではないことが示された。また、「抑圧型」では、当人にとって重要なゴールと現状との不一致が小さく、それゆえ陰性情動の自己報告が低いことが示唆された。研究 2 の結果から、「抑圧型」において観察された非現実的な楽観傾向は、実際にゴールと現状との不一致がないことによるのではなく、現状に関するフィードバック情報が無視されているためであることが示唆された。すなわち、「抑圧型」では、定期試験前になされた成績予測得点は最も高く、実際の成績は最も悪かった。また、予測に比して成績が悪かった場合、他群では結果のフィードバックを受けて予測が下方修正されたのに対し、「抑圧型」では予測が変わらないか上方修正される場合さえあった。本研究では、「抑圧型」ではそもそも負の結果のフィードバックが適切に評価されないためにこうした楽観傾向が維持されており、それゆえ状況に応じた対処方略の選択と修正が妨げられていることが示唆された。こうした結果から、「真の適応」とは、状況に応じた適切な対応をなし得る認知構造の柔軟性にあるのではないかと考えられる。

キーワード：不安、肯定的幻想、「抑圧型」、自己報酬的なバイアス、非現実的な楽観傾向

問 題

従来から、精神的健康を維持するためには現実世界や自己について正確に把握することが重要であると考えられてきた (e.g. Jahoda, 1958)。しかし、多くの社会的認知研究によって、通常の私達の判断過程は、期待や自己報酬的な (self-serving) 解釈によって歪められる傾向にあることが報告されており、例えば、現在の自己や将来の見通しに対する評価は、多くの場合、肯定的な方向に偏向することが知られている (e.g. Brown, 1986 ; Weinstein, 1980)。こうした先行研究を踏まえ、Taylor ら (1989 ; Taylor & Brown, 1988) は、精神的健康と現実知覚との関わりについての過去の研究を再検討し、主に非抑うつ者としての健常者においては、1) 過度に肯定的な自己評価傾向、2) 出来事に対する過度

の統制感、3) 将来、他者に比して自分には悪いことよりも良いことが生ずるだろうと見積もる非現実的な楽観傾向が、一貫して観察されることを見出した。多数の人が他人より優れているということは論理的に不可能であることから、Taylor はこれを「肯定的幻想 (positive illusion)」と呼んでいる。そして、Taylor らは、多くのデータによって「肯定的幻想」が精神的健康や適応と結びついていることが支持されていると論じ⁴、Jahoda (1958) に示されるような従来の精神的健康観に対して疑問を投げかけている。その後の研究においても、Taylor は自らの主張を支持する結果を報告している。例えば、Taylor & Brown (1994) は、「肯定的幻想」のなかでも非現実的な楽観傾向は健常者の少なくとも 85% に、平均すれば 95% に見出され、かなり普遍的に観察されるとしている。また、癌やエイズなどの

¹ E-mail : asak04@df.mbn.or.jp

² 日本学術振興会 E-mail : atsuchan@pop02.odn.ne.jp

³ 本研究の実施にあたって、第二著者に対する平成 11 年度文部省科学研究費 (特別研究員奨励費) の補助を受けた。

⁴ しかし、こうした議論は、自己の独自性・自律性・独立性に価値を置く個人主義的社会を背景としたものであり、同様な傾向が相互依存的社会においても見出される保証はないことに注意する必要がある (遠藤, 1995 ; Cross & Markus, 1999)。

ストレス負荷の高い疾患の罹病者を対象とした研究においても、「肯定的幻想」が強いほど心理的な適応状態が良く、事態に対するより効果的な対処行動が維持されていることを示す結果が得られているとし、Taylorらは、「肯定的幻想」は身体的健康にも良い影響を及ぼすと解釈している (Taylor, Kemeny, Aspinwall, Schneider, Rodriguez & Herbert, 1992)。

しかし、これらの研究で用いられている健康の指標の大半は自己報告式の尺度得点のみに基づいており、その回答がまさに「肯定的幻想」によって歪められている可能性を否定できない。実際、Schedler, Mayman & Manis (1993) はこの点を問題視し、陰性情動の自己報告が低い者の中に、行動・生理指標においては高い陰性情動を示す反応が観察される群があることを見出している。これらの結果から Schedler et al. (1993) は、陰性情動の自己報告と行動・生理指標とが一致しない群においては状況が大きく歪んで知覚されている可能性があり、Taylorらの得た結果は、こうした群が健常者サンプルに混入していたことによるアーチファクトではないかと述べている。そして、このような指標間の不一致を一貫して示す「抑圧型」(Weinberger, Schwartz & Davidson, 1979) に言及し、こうした知覚の歪みは多大な生理的コストを伴うのではないかと問題視している。ここでの「抑圧型」は、Manifest Anxiety Scale (Taylor, 1953) などの特性不安尺度の低得点者で、かつ Marlowe-Crowne 社会的望ましき尺度(MC 尺度, Crowne & Marlowe, 1964) の高得点者 (少なくとも上位 1/3 以上) と操作的に定義される (詳細は、佐藤・安田, 1999)。一方、「真の低不安群」は両尺度における低得点者である (TABLE 1)。Weinberger et al. (1979) は、「真の低不安群」ではストレス課題時の不安の自己報告と生理反応やパラ言語などの行動反応とは一致するのに対し、「抑圧型」では両者は一致せず、主観的な不安報告は低いが生理・行動反応は高不安群と同等かそれ以上に大きいであろうと考え、ストレス課題時の両指標を比較しこの仮説を検証している。結果は Weinberger et al. (1979) の仮説を支持するものであり、これは多くの追試研究によって確認されている (e.g. Asendorf & Scherer, 1983; Schwartz, 1990; 本邦では、神村, 1996)。Weinberger (1990) は、こうした指標間の不一致が生ず

る理由として、「抑圧」と呼ばれる情報処理バイアスが関与しているのではないかと考えている。

「抑圧型」の認知バイアスに関しては、これまで記憶課題を用いた検討が行われている。例えば、Davis (1987) は、「抑圧型」では、自伝的記憶課題においては「真の低不安群」「高不安群」に比して否定的な記憶の想起数が少なく、また、手掛かり再生課題においては恐怖や怒りに関連する記憶の検索潜時が有意に長いことを見出している。「抑圧型」で観察される否定的な自己関連情報のアクセシビリティの低下は、将来の出来事の予測に対してもバイアスを与える。なぜなら、出来事の起こり易さについての判断は、その出来事に関連する記憶の検索のし易さやシミュレーションのし易さに影響されるからである (Tversky & Kahneman, 1973)。実際、Myers & Brewin (1996) は、否定的および肯定的な出来事が将来どの程度自分に起こりそうかについて被験者に判断させたところ、「抑圧型」は、「真の低不安群」「高不安群」「防衛的高不安群」に比して否定的な出来事の可能性は低く、肯定的な出来事の可能性は高く見積もっており、非現実的な楽観傾向を示すことを見出している。この研究ではまた、過度に肯定的な自己評価傾向は「抑圧型」においてのみ観察されたことから、Taylorらの得た結果は健常者サンプルに「抑圧型」が混入したことによるアーチファクトではないかと、Schedler et al. (1993) と同様の見解が提出されている。

こうした研究に示されるように、「抑圧型」では過度に肯定的なバイアス (いわゆる「肯定的幻想」) が一貫して観察されている。確かに、主観報告に限定すれば、「抑圧型」は不安や抑うつなどの陰性情動は低く、適応上は問題がないように見える。しかし、「抑圧型」では、陰性情動の自己報告の低さに反し、生理・行動指標においては高い陰性情動が体験されていることは、多くの研究で指摘されている⁵。また、他群に比して感冒や悪性腫瘍などの免疫関連疾患の罹病率が高く予後も悪いことが報告されており (e.g. Kneier & Temoshok, 1984; Ward, Leventhal & Love, 1988)、「抑圧型」は主観的には健康であるとしても、身体的にも健康であるとは言い切れない。ここでひとつの疑問が生じる。すなわち、

TABLE 1 「抑圧型」の分類法

	区分	Marlowe-Crowne 尺度	
		低	高
STAI	低	低不安群	抑圧型
特性不安尺度	高	高不安群	防衛的高不安群

⁵ 不安が報告される場合、心拍数や血圧の上昇、皮膚伝導反応、皺眉筋や口角筋などの表情筋の反応が観察される。しかし、例えば、定位反応としても同様の皮膚伝導反応や皺眉筋の反応が観察されるなど、各生理指標は必ずしも個別情動と対応しない。そのため、不安の存在を推測する場合には、こうした身体反応の布置と現行の文脈を考慮した上で判断される。

「肯定的幻想」が精神的健康の維持や促進と結びついていとしても、多くの「抑圧型」研究が指摘するように、身体的健康を損なうなどのリスクを伴う可能性があり、非現実的な楽観傾向が維持されることには何らかの適応上の問題が伴うのではないか。以上の問題を考え、研究1ではまず、低不安群を特性不安尺度得点のみによって抽出した場合と、その中で「抑圧型」と「真の低不安群」とを区別した場合とを比較し、過度に肯定的なバイアスが「真の低不安群」においても見出されるかどうかを確認する。これまでの研究を鑑みれば、こうした傾向は「抑圧型」においてのみ観察されるだろうと予測される。この仮説が支持されるならば、Taylorらの得た結果は、健常群に「抑圧型」が混入したためのアーチファクトである可能性が示唆され、変数として陰性情動報告を用いる研究では、「真の低不安群」あるいは「真の抑うつ低群」と「抑圧型」とを区別する必要があることが改めて示されるだろう。

「抑圧型」では自己報告による陰性情動が低いことは、既に述べた通りである。一般的には、本人にとって重要なゴールと現状との間に不一致があると認知された場合に陰性情動が生じると考えられている。例えば、Higgins (1987) は、「当為」自己と現実の自己の不一致によって不安が、「理想」自己と現実の自己の不一致によって抑うつが生じるとしている。そこで研究1では、「抑圧型」でこうした不一致が認知されているかどうかを併せて確認する。そして研究2では、こうした不一致が認知されていないとすれば、「抑圧型」にはそもそも実際に不一致がないためなのか、あるいは現状を知らせるフィードバック情報が無視されているためなのかを調べる。後者の場合には、適応上の問題が生じると予測される。

研究 1

「肯定的幻想」に見られるような過度に肯定的なバイアス、その中でも特に、過度に肯定的な自己評価傾向および非現実的な楽観傾向は、「真の低不安群」においても見出されるだろうか。あるいは、「抑圧型」においてのみ特徴的に見出されるだろうか。また、「抑圧型」では、本人にとって重要なゴールと現状との不一致がそもそも認知されているだろうか。群による相違を明らかにするため、被調査者を特性不安尺度によってのみ分類した場合と、MC尺度を組み合わせて特性不安尺度低得点者を「真の低不安群」と「抑圧型」を区別した場合とを比較し、以上の点を検討する。

方法

被調査者 都内および千葉県内の専門学校生・大学生・社会人356名（男109名、女247名；平均年齢21.8歳、SD 5.92, range 18–68）。出現頻度のやや低い「抑圧型」サンプルを確保するため、あらかじめMC尺度によるスクリーニングを実施し、調査対象となった125名の中から「低不安群」「高不安群」「抑圧型」の3群を抽出する⁶。TABLE 1に示すように、特性不安尺度とMC尺度双方の高得点者は、「防衛的高不安群」として理論上は「高不安群」と区別されるが、両尺度は負の相関関係にあり、その出現頻度はきわめて低く、また、本研究では重要でないため、今回の分析では除外する。なお、調査は通常の授業時間内に実施された。

質問紙の構成

- 1) 自己表象、および現実とゴールの間の不一致：自己評価がどの程度肯定的であるか、および現実の自己とゴールの間の不一致率を測定するため、佐藤・安田・吉村(1998)によるself guides 質問紙を用いた。当質問紙は、自己ならびに重要な他者からの視点による基準（「理想」と「当為」）と実際の自己の評価との不一致を査定するために、Higgins, Klein & Strauman (1985) が作成した質問紙を改作したものである。被調査者には、自己の視点による「現実」「理想」「当為」、重要な他者の視点からの「現実」「理想」「当為」の6側面について、該当すると思われる特性形容詞をチェックさせるようになっている。特性形容詞は、自己表象の複雑性を査定するために林・堀内(1997)が使用した形容詞40項目（肯定・否定各20語）が用いられた。
- 2) ライフイベントの将来予測：ネガティブおよびポジティブなライフイベントを、将来どの位の可能性で体験すると見積もっているかを測定するため、Myers & Brewin (1996) が用いた項目を改変し、初期段階では、13のネガティブ項目と7つのポジティブ項目を設定した。被調査者には、自身がそれぞれの出来事を体験する可能性はどの位あると思うかについて、「全くない」から「とてもある」の5段階で評価させた。なお、非現実的な楽観傾向とは、他者に比べて自身がネガティブ・イベントを体験する可能性はより低く、ポジティブ・イベントを体験する可能性はより高いだろうと見積もる傾向を指す。そこで、被調査者には同時に、自分の友人や同年齢の人達に比べた場合、自身がそれぞれの出来事を体験する可能性はどの位あると思うか

⁶ 今回のスクリーニングは、他の研究目的を兼ねて行っており、MC尺度高得点者が40名であったことから、それに合わせて各群40名を、計120名を抽出した。本研究の調査は、その後新たに得られたデータを含む125名を対象に実施された。

について、「周りの人と同程度」を3とし、「周りの人に比べて可能性はかなり低い」から「周りの人に比べて可能性はかなり高い」までの5段階で評定させた。

3) 楽観主義尺度：8項目から成る日本語版 Life Orientation Test (日本語版 LOT, 戸ヶ崎・坂野, 1993) を用いた。本尺度は、個人特性としてのオブティミズムを測定するものであり、ライフイベントの将来予測から得られる楽観傾向に関する結果を補足するため、併せて実施した。

4) 特性不安尺度：主観的な不安傾向を測定するため、20項目から成る STAI 特性不安尺度日本語版 (清水・今栄, 1981) を用いた。

5) MC 尺度日本語版 (佐藤ら, 1998)：本尺度は、特性不安尺度低得点者をさらに「抑圧型」と「真の低不安群」とに区別する目的で用いた。

6) 抑うつ尺度：主観的な抑うつの報告を測定するため、日本語版 Beck Depression Inventory (BDI, 林・瀧本, 1991) を用いた。尺度得点において不安と抑うつとは .60前後の強い相関をもつが、両者での判断バイアスは異なることが示唆されている (e.g. MacLeod, 1999)。本研究では、抑うつ要因を統制した上で不安の効果について検討するため、併せて実施した。

結果と考察

「抑圧型」の分類 本研究での特性不安尺度の平均値は48.9 (SD 10.81), MC 尺度の平均値は7.9 (SD 4.64) であった。まず、特性不安尺度の平均値で被調査者を高・低2分割し、次に、MC 尺度の「平均値+1 SD」を基

準に被調査者を高・低2分割した。その上で、両尺度での低得点者を「低不安群」、特性不安尺度での低得点者かつ MC 尺度での高得点者を「抑圧型」、特性不安尺度での高得点者かつ MC 尺度での低得点者を「高不安群」、両尺度での高得点者を「防衛的高不安群」に分類した。なお、「防衛的高不安群」に分類された被調査者は11名であり、方法の項で述べた理由により除外した。データに欠損のある者を除いた結果、最終的に対象となったのは、「低不安群」29名、「抑圧型」33名、「高不安群」29名、計91名であった (男25名, 女66名; 平均年齢23.0歳, SD 7.52)。以下、特性不安尺度のみによって抽出された低不安群に見出される傾向が、「抑圧型」と区別された「真の低不安群」においても維持されるのかを明らかにするため、「真の低不安群」と「抑圧型」とが区別されない場合と、両者を区別し被験者を3群に分けた場合の、各指標の群別平均値を求めた (TABLE 2)。

自己表象, およびゴールと現状の間の不一致 self guides 質問紙で使用した特性形容詞についてクラスター分析を行ったところ、「ひかえめな」が否定語から肯定語に移動し、肯定語は21語、否定語は19語であることが見出されたため、本研究では、肯定語21語、否定語19語とした。自己表象に関しては、現実の自己の評定に用いた形容詞に占める肯定語の率 (自己表象のポジティブ率) を、また、現実とゴールとの間の不一致に関しては、現実の自己と、自己および重要な他者の視点からの「理想」「当為」ゴールに対する評定との間の不一致率を指標とした。以下、「抑圧型」と「真の低不

TABLE 2 各群の尺度得点

	低不安群+抑圧型 Mean(SD)	高不安群 Mean(SD)	低不安群 Mean(SD)	抑圧型 Mean(SD)	F(2,90) ^{a)}	
MC	10.0(4.15)	4.1(2.56)	6.2(2.47)	13.4(1.75)	142.92***	(高不安 < 低不安 < 抑圧型)*
STAI	40.6(5.72)	60.5(6.82)	42.8(5.99)	38.1(5.11)	122.17***	(抑圧型 < 低不安 < 高不安)*
Depression (BDI)	6.2(5.51)	11.2(1.98)	8.4(7.48)	4.2(5.58)	11.11***	(抑圧型 < 低不安 < 高不安)*
self-positive% ^{b)}	62.4(22.09)	28.2(27.47)	50.0(21.18)	73.3(16.61)	38.22***	(高不安 < 低不安 < 抑圧型)*
actual/own-ideal/own discrepancy	60.2(28.33)	86.2(18.44)	67.7(29.51)	53.7(25.44)	12.96***	(抑圧型 < 高不安, 低不安 < 高不安)* (抑圧型 < 低不安)+
actual/own-ought/own discrepancy	55.9(24.61)	82.1(24.42)	63.0(27.56)	49.6(20.07)	14.16***	(抑圧型 < 高不安, 低不安 < 高不安)* (抑圧型 < 低不安)+
actual/own-ideal other discrepancy	60.8(25.25)	83.4(25.41)	66.7(23.73)	55.1(25.66)	9.85***	(抑圧型 < 高不安, 低不安 < 高不安)* (抑圧型 < 低不安)+
actual/own-ought/other discrepancy	58.2(27.01)	79.0(29.12)	65.4(28.37)	54.0(25.46)	6.43**	(抑圧型 < 高不安, 低不安 < 高不安)* (抑圧型 < 低不安)+
negative life event(self)	2.5(0.60)	3.8(0.49)	2.9(0.45)	1.8(0.45)	73.26***	(抑圧型 < 低不安 < 高不安)*
positive life event(self)	3.6(0.45)	2.8(0.53)	3.1(0.46)	3.8(0.38)	12.24***	(高不安 < 抑圧型, 低不安 < 抑圧型)*
negative life event(compared)	2.3(0.63)	3.1(0.42)	2.7(0.48)	1.7(0.50)	64.39***	(抑圧型 < 低不安 < 高不安)*
positive life event(compared)	3.1(0.49)	2.7(0.60)	2.9(0.42)	3.4(0.40)	11.28***	(高不安 < 抑圧型, 低不安 < 抑圧型)*
optimism(LOT)	32.1(5.60)	23.7(5.34)	29.5(5.46)	37.1(2.52)	45.11***	(高不安 < 低不安 < 抑圧型)*

***p<.001 **p<.01 *p<.05 +p<.10

^{a)} 「高不安群」「低不安群」「抑圧型」の3群を対象とした分析結果。括弧内は、TukeyのHSD法による下位分析で有意な群間差が得られた組み合わせを示す。

^{b)} 各群の代表値は平均を示す。検定はKruskal Wallis法による。

安群」の相違を中心に検討する。

まず、自己表象のポジティブ率について Kruskal Wallis 法による U 検定を実施した結果、各群間で有意差が見出された。TABLE 2 に見るように、特性不安尺度のみによって抽出された低不安群では自己表象は肯定的方向に偏向し、こうした傾向は「抑圧型」において著しいが、「真の低不安群」には見出されなかった。このことから、過度に肯定的な自己評価傾向は「抑圧型」においてのみ観察され、「抑圧型」と「真の低不安群」を区別しない低不安群では、「抑圧型」の混入によってこうした傾向が不当に強くなることが示された。次に、現実とゴールの間の不一致を示す各指標について、それぞれ群を独立変数とする 1 要因の分散分析を行った。TABLE 2 に見るように、「抑圧型」の不安および抑うつ報告は「真の低不安群」に比しても有意に低く、また、有意傾向ではあるが、「真の低不安群」以上に現実と各ゴールとの間の不一致が小さいことが見出された。Higgins(1987)の仮説に基づき、特性不安尺度得点および抑うつ尺度得点を基準変数、ゴールと現状との不一致を示す各指標を説明変数として重回帰分析を行ったところ、不安は自己の視点による「当為」自己と現実の自己の不一致のみによって ($r=.45, p<.001$; $R^2=.32$), 抑うつは自己の視点による「理想」自己と現実の自己の不一致のみによって説明された ($r=.56, p<.001$; $R^2=.25$)。今回の結果は、「抑圧型」は、現実と各ゴールとの間の不一致を「真の低不安群」以上に認知していないことを示しており、このことは、「抑圧型」の不安や抑うつ報告が低いことに反映されていたといえる。

ライフイベントの将来予測と楽観傾向 ライフイベントの将来予測に関するネガティブおよびポジティブ項目の弁別力を確認するため、被調査者が自身に対して行った評定に基づき各イベント別に項目分析を行ったところ、1%の有意水準でネガティブ11項目、ポジティブ6項目が残された。次に、内的整合性を確認するため、17項目を対象に斜交プロマックス回転による因子分析（主成分法）を行ったところ、主としてネガティブ11項目より構成される第1因子と、主としてポジティブ5項目より構成される第2因子とが抽出された。因子間相関は $-.38$ であり、各項目の因子負荷量および α 係数の値から、以上の16項目は以後の分析に耐え得ると判断し、最終項目として採用した (TABLE 3)。なお、両イベント項目数は異なるため、各イベント項目の評定平均値を指標として用いた。両イベント指数の相関係数は $-.37$ であった。また、楽観主義傾向の指標として日本語版 LOT の合計得点を用いた⁷。

TABLE 3 ライフ・イベント将来予測項目および因子分析結果

項 目	第1因子 ($\alpha=.82$)	第2因子 ($\alpha=.54$)
02. 痛にかかる	0.71	-0.23
10. 大事な試験で失敗する	0.68	-0.33
01. 自分の家が火事になる	0.65	-0.28
13. 指名手配される	0.64	-0.12
03. 誰かに訴えられる	0.62	-0.27
06. つまらない仕事に就かなければならなくなる	0.62	-0.27
09. 心臓発作に見舞われる	0.61	-0.11
17. 胃潰瘍になる	0.63	-0.09
18. 自動車事故で怪我をする	0.56	-0.28
15. 期待されていた仕事をうまくこなすことができない	0.63	-0.38
08. 大きな借金を抱える	0.41	-0.02
14. 勉学や仕事が高く評価される	-0.31	0.65
16. 痛にかかったとしてもそれを克服する	-0.31	0.53
11. この冬、病気をせずに過ごす	-0.22	0.52
19. 裕福になる	-0.28	0.51
07. 80歳を過ぎるまで長生きをする	-0.28	0.48
因子負荷量二乗和	4.61	2.11
寄与率	42.31	18.13

まず、自身に対する各イベント予測について、群を要因とする 1 要因の分散分析を行った。その結果、ネガティブ・イベントについては、「高不安群」>「真の低不安群」>「抑圧型」の順に可能性を高く見積もっていること、また、ポジティブ・イベントについては、「抑圧型」は他 2 群に比して可能性を高く見積もっているが、「真の低不安群」と「高不安群」の間には差がないことが見出された (TABLE 2)。他者に比した場合の自身に対する見積もりについても、結果は同様であった。なお、他者と比較する場合の尺度上の中点（他者と同程度）と実際の評定との差は、他者に比して自身が体験する可能性をより低くあるいは高く見積もっていることを示す。群によってこうした見積もりに特徴的な傾向があるかどうかを明らかにするため、1 サンプルの t 検定により中点 (=3.0) と各評定値とを比較した結果、「抑圧型」と「真の低不安群」とを区別しない群は、ネガティブ・イベントの可能性を他者に比して有意に低く見積もっていること ($t(61)=7.69, p<.001$)、こうした傾向は両群を区別した場合にも維持されるが、「抑圧型」で特に強いことが見出された ($t(32)=3.98, p<.001$;

⁷ 戸ヶ崎・坂野 (1993) によれば、日本語版 LOT は「現在と将来に対するポジティブな思考」および「過去に対するネガティブな思考」の 2 因子構造となっているが、本研究のデータを主成分法による因子分析にかけた結果、第1因子に対する因子負荷量はいずれの項目も絶対値で.50を越え、後者に該当する 2 項目を除いた場合の第1因子は $\alpha=.68$ 、2 項目を入れた場合は $\alpha=.78$ であり、1 因子のみで説明することがむしろ妥当であると判断した。よって、「過去に対するネガティブな思考」に該当する 2 項目を逆転項目として合計得点を算出した。

「真の低不安群」 $t(28)=2.83, p<.01$ 。また、ポジティブ・イベントに関しては、「抑圧型」と「真の低不安群」とを区別しない群には有意な傾向は見出されないが ($t(61)=1.70, n.s.$)、両群を区別すると、「抑圧型」においてのみ他者に比してポジティブ・イベントの可能性を有意に高く見積もる傾向が見出された (「抑圧型」 $t(32)=10.80, p<.001$; 「低不安群」 $t(28)=1.90, n.s.$)。「高不安群」はネガティブ・イベントの可能性を他者に比して高く ($t(28)=3.09, p<.001$)、ポジティブ・イベントの可能性を低く見積もる傾向があった ($t(28)=3.57, p<.001$)。さらに、楽観主義尺度得点について群を要因とする 1 要因の分散分析を行った結果、「抑圧型」>「真の低不安群」>「高不安群」の順に楽観傾向が強いことが見出された (TABLE 2)。今回の楽観主義尺度の平均得点は 28.7 (SD 7.00) であり、「抑圧型」の平均得点が全体平均 + 1 SD を越える極端に高い値であったことは、「抑圧型」には極めて強い楽観主義傾向があることを示しているといえる。最後に、抑うつ要因を統制した上で以上の結果に対する不安の効果を検討するため、群を独立変数、各イベント指数を従属変数、BDI 得点を共変量として主効果と共に投入し、共分散分析を行った。その結果、ネガティブ・イベントに関しては、共変量投入後も群の主効果は有意に保たれたが ($F(2.90)=36.26, p<.001$)、共変量の主効果は有意でなかった ($F(2.90)=3.83, n.s.$)。また、ポジティブ・イベントに関しては、共変量投入後の群の主効果も ($F(2.90)=8.13, p<.001$)、共変量の効果も ($F(2.90)=5.72, p<.05$) とともに有意であった。したがって、ネガティブ・イベントの将来予測に関して得られた今回の結果は不安の効果によること、また、ポジティブ・イベントの将来予測に関する結果を解釈する際には抑うつ効果も考慮に入れなければならないが、抑うつ要因を統制した上でも不安の効果が維持されることが示された。以上、「真の低不安群」と「抑圧型」とを区別しない低不安群では、他者に比してネガティブ・イベントの可能性を低く、ポジティブ・イベントの可能性を高く見積もるという非現実的な楽観傾向が見出された。しかし、両者を区別した場合、「抑圧型」はこうした傾向を強く示すが、一方、「真の低不安群」はネガティブ・イベントの可能性をやや低く見積もるという形で若干の楽観傾向を示したものの、ポジティブ・イベントの将来予測に関してはむしろ「高不安群」と同程度の見積もりを行っており、それほど楽観的であるとはいえないことが示された。

研究 2

研究 1 で見出されたように、「抑圧型」では当人にとって重要なゴールと現状との不一致が最も低く、陰性情動の報告も最も低い。これだけを見れば、確かに「抑圧型」は最も良好な適応状態にある。しかし、既に述べたように、「抑圧型」では、自己報告に反して生理・行動指標の上ではむしろ陰性情動反応が高いこと、また免疫疾患の罹病率が高く予後が悪いことなどが報告されている。こうした矛盾はどのように説明されるだろうか。ひとつの可能性として、報告バイアスによって不安尺度に対する回答が歪められていることが考えられるが、その可能性は既に否定されており、実際に「抑圧型」では不安が体験されていないことが報告されている (e.g. Derakshan & Eysenck, 1998)。

近年の神経科学研究では、情緒の情報処理には視床—扁桃核回路と視床—皮質—扁桃核回路の 2 つの並列的な回路が関与しており、前者は即時的な脅威の有無の弁別による行動・生理反応の起動に、後者は高次の評価を通じたその修正や精緻化に関与していると考えられている (LeDoux, 1996)。こうした知見に従えば、「抑圧型」では高次の評価を媒介とする主観的な陰性情動の体験は妨げられているが、それとは独立した扁桃核回路では脅威が弁別されているという解離が生じているのではないかと推測される。つまり、「抑圧型」では、現状を知らせるフィードバック情報が高次評価の過程で歪曲あるいは無視されるため、主観報告ではゴールと現状との不一致が小さいという結果が得られるのではないだろうか。もし、「抑圧型」でフィードバック情報が正当に評価されておらず、そのために非現実的な楽観傾向が維持されているのならば、こうした楽観傾向はむしろ問題視されなければならない。なぜなら、それによって状況に適切な対処方略の選択とその修正が妨げられる可能性があるからである (e.g. Weinstein, 1982)。対処方略は一旦学習されれば長期記憶として貯蔵され、自動的に引き出すことが可能であろう。しかし、それが不適切である場合、状況を適切に評価し対処方略を修正していく必要がある。それがなされなければ、状況の如何に拘わらず同じ対処方略が起動するという「不適応」が生じてしまうと考えられる。本研究では、現実の試験場面を用い、試験実施前になされた得点の予測と結果の良悪の可能性についての見積もりと、実際の成績、および結果のフィードバックを受けた後で再度なされた見積もりとを比較し、「抑圧型」ではフィードバック情報がどのように処理されて

いるのかについて考察する。

方法

被験者 都内の専門学校生・短大生154名（男45名、女109名；平均年齢23.9歳、SD 7.94）。調査は複数箇所で行われたが、実施された試験はいずれも同一内容であった。採点方式の変動による誤差を防ぐため、試験問題は全て選択または穴埋め形式とした。

実験計画 3（群）× 2（フィードバック条件）の2要因計画。両要因ともに被験者間要因である。従属変数としては、試験の得点予測・自己ならびに他者が悪い結果および良い結果を得る可能性についての見通しを用いる。

手続き 調査は、定期試験施行1週間前と試験結果フィードバック後の計2回実施した。調査ではまず、被験者が試験に関してどのような見通しを持っているかを知るため、①試験で自分は100点満点で何点採れると思うか、②自身と講義を受講している他の学生が試験で悪い結果および良い結果を得る可能性は、それぞれの位あると思うかを尋ねた。②の項目は、現実の試験場面においても「抑圧型」では非現実的な楽観傾向が見られるかどうかを確認するために設定した。また、各被験者はどのような基準でこれらの見積もりを行ったのかを知るため、③試験が自分にとってどの程度重要だと考えているか、④予測した点数は自分にとってどの程度良いものであるかを尋ねた（①、②、③、④の計7項目）。予測得点を除く各項目は、「全くない（非常に悪い）」から「とてもある（非常に良い）」の5段階評定とした。また、被験者を群分けするため、STAI 特性不安尺度日本語版とMC 尺度日本語版を第1回調査時に併せて実施した。なお、調査時期によって予測対象が異なるため、第1回調査時は「1週間後に実施される定期試験では、どの位の成績がとれると思いますか」と、第2回調査時は「今日結果を受け取った今回の試験と同様の試験を次に受けるとしたら、その時にはどの位の成績がとれると思いますか」と教示した。

結果と考察

「抑圧型」の分類 本研究での特性不安尺度の平均値は49.8 (SD 11.18)、MC 尺度の平均値は6.9 (SD 3.18)であった。研究1と同様の手続きによって被験者を分類したところ、最終的に分析対象となったのは、「低不安群」62名 (STAI 43.0, SD 5.06 ; MC 6.1, SD 2.31)、「高不安群」59名 (STAI 60.7, SD 6.77 ; MC 5.0, SD 2.56)、「抑圧型」18名 (STAI 37.2, SD 4.70 ; MC 12.4, SD 1.04)、計139名であった（男41名、女98名；平均年齢24.8歳、SD 8.30）。

試験実施前の結果予測と実際の成績との比較 結果の分析に先立ち、試験をどの程度重要だと考えているか、また、予測得点は自分にとってどの程度良いものかという点で群間差があるかどうかを確認するため、各指標についてそれぞれ群を独立変数とする1要因の分散分析を行った。その結果、いずれも主効果は得られず ($F(2,136) = .20, n.s.$; $F(2,136) = 1.05, n.s.$)、以下の結果を解釈する際にこれらの要因を考慮しなくてよいと判断した。以後の分散分析の下位検定では、有意水準を5%に設定しTukeyのHSD法を行っている。

まず、得点に関する2つの指標について、それぞれ群を独立変数とする1要因の分散分析を実施したところ、予測得点 ($F(2,136) = 7.59, p < .001$) および実際の成績 ($F(2,136) = 5.13, p < .01$) で有意な主効果が得られた。また、下位検定の結果から、「抑圧型」は「低不安群」および「高不安群」に比して、予測得点は有意に高いが、実際の成績は有意に低いことが示された (FIGURE 1)。次に、自身が試験で悪い結果および良い結果を得る可能性についての判断に関してそれぞれ、群を被験者間要因、評価対象(自身、他者)を被験者内要因とする2要因の繰り返しのある分散分析を行った。その結果、いずれの判断においても、群 ($\text{negative } F(2,136) = 2.37, n.s.$; $\text{positive } F(2,136) = .86, n.s.$) および評価対象 ($\text{negative } F(1,136) = 1.67, n.s.$; $\text{positive } F(1,136) = 3.20, n.s.$) の主効果は得られなかったが、群×評価対象の交互作用は有意であった ($\text{negative } F(2,136) = 10.97, p < .001$; $\text{positive } F(2,136) = 10.33, p < .001$)。また、下位分析を行った結果、「抑圧型」は他2群に比して、自身が悪い結果を得る可能性を有意に低く、良い結果を得る可能性を有意に高く見積もっていることが示されたが、他者に対する評定に関しては有意な群間差は見出されなかった。こうした結果から、「抑圧型」は他者に比して自身が悪い結果を得る可能性を低く、良い結果を得る可能性を高く見積もっていると推測される。この点を確認するため、群

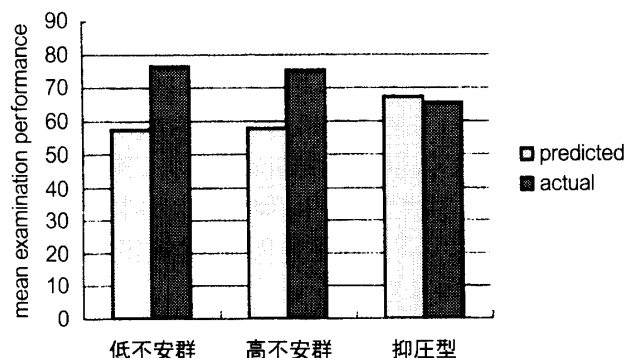


FIGURE 1 試験前の予測得点と実際の成績

ごとに、自身に対して行った評定と他者に対して行った評定との間に対応のある t 検定を実施した。結果は上記の推測を支持するものであり (negative $t(17)=3.69$, $p<.05$; positive $t(17)=2.72$, $p<.05$), 「抑圧型」は非現実的な楽観傾向を示すことが確認された。他方, 「低不安群」 (negative $t(61)=3.42$, $p<.001$; positive $t(61)=3.74$, $p<.001$) および 「高不安群」は (negative $t(58)=4.15$, $p<.001$; positive $t(58)=4.46$, $p<.001$), 他者に比して悪い結果を得る可能性を高く, 良い結果を得る可能性を低く見積もっており, 悲観的な見積もりを行っていることが示された (TABLE 4)。こうした「抑圧型」の一貫した楽観傾向に反して, 試験の実際の成績は「抑圧型」が最も悪かった。

TABLE 4 試験実施前の結果の見積もりの平均値

		低不安群	高不安群	抑圧型
negative	self	3.2(.55)	3.3(.60)	2.7(.24)
	other	2.9(.48)	2.8(.53)	3.1(.32)
positive	self	2.9(.46)	2.8(.60)	3.3(.49)
	other	3.2(.55)	3.2(.60)	2.9(.24)

試験実施前の予測と試験成績フィードバック後の予測との比較 試験前の予測得点より実際の成績が悪かった場合, 結果のフィードバックは負として, また, 予測得点より実際の成績が良かった場合, 結果のフィードバックは基本的には正としてそれぞれ認知され, その後の成績予測に及ぼす影響は両者で異なると考えられる。そこで, 被験者を予測得点より実際の成績が悪かった場合 (負の結果のフィードバック条件) と, 予測得点より実際の成績が良かった場合 (正の結果のフィードバック条件) とに分類した上で, 試験前と結果のフィードバックを与えた後とでは, 試験に関する予測がどのように変わるかを検討した。なお, フィードバック後に出された予測得点が当人にとってどの程度良いものに群間差があるかどうかを確認するため, 予測得点の良悪を従属変数, 群とフィードバック条件を独立変数とする 2 要因の分散分析を行った。その結果, 群とフィードバック条件の主効果 ($F(2,133)=1.21$, n.s.; $F(2,133)=1.32$, n.s.) と交互作用 ($F(2,133)=.78$, n.s.) はいずれも有意ではなく, 以下の結果を解釈する際にこれらの要因を考慮しなくてよいと判断した。以後の分散分析の下位検定では, 有意水準を 5% に設定し Tukey の HSD 法を行っている。

まず, フィードバック条件毎に, 群を被験者間要因, 得点の予測時期 (試験前と成績フィードバック後) を被験者内要因とする 2 要因の繰り返しのある分散分析を実施

した。その結果, 正の結果のフィードバック条件では, 群および得点の予測時期の主効果は得られたが ($F(2, 107)=3.10$, $p<.05$; $F(1,107)=59.88$, $p<.001$), 群×得点の予測時期の交互作用は有意でなかった ($F(1,107)=2.12$, n.s.)。また, 負の結果のフィードバック条件では, 群および得点の予測時期の主効果が得られ ($F(2,26)=8.35$, $p<.01$; $F(1,26)=20.80$, $p<.001$), 群×得点の予測時期の交互作用も有意であった ($F(2,26)=6.56$, $p<.01$)。下位検定の結果では, いずれの条件においても, 「抑圧型」と「低不安群」および「高不安群」との間に一貫して有意な群間差があることが見出された。これらの結果は, フィードバックの正負に拘わらず「抑圧型」が他 2 群に比して一貫して有意に高い得点予測を行っていることを示す (FIGURE 2.1-2)。さらに, 正の結果のフィードバック条件では, いずれの群も結果のフィードバックを受けて次の予測を上方修正する傾向があること, 負の結果のフィードバック条件では, 「低不安群」および「高不安群」は結果のフィードバックを受けて次の予測を下方修正するのに対し, 「抑圧型」は逆に上方修正する傾向があることを示す。このことから, 「抑圧型」では, 正の結果のフィードバックは情報として適切に評価され

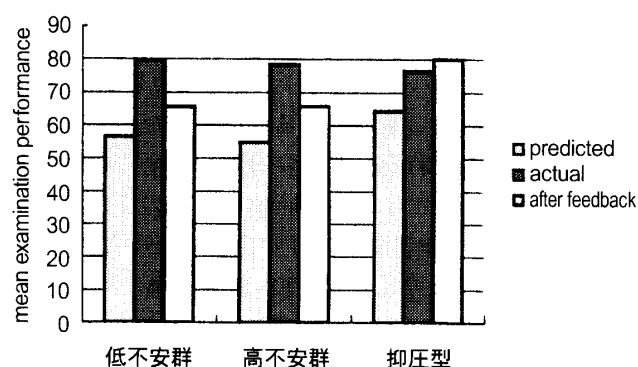


FIGURE 2.1 試験前およびフィードバック後の予測得点 (正の結果のフィードバック条件)

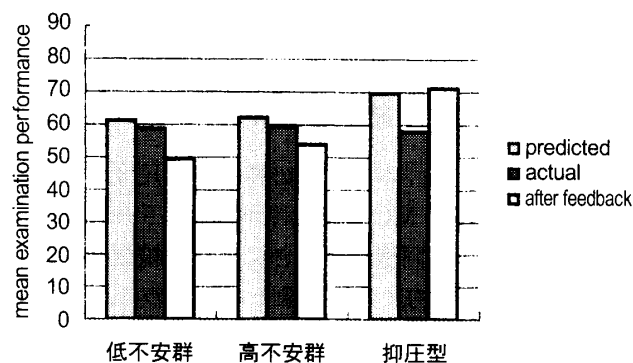


FIGURE 2.2 試験前およびフィードバック後の予測得点 (負の結果のフィードバック条件)

ているが、負の結果のフィードバックは適切に評価されていないのではないかと推測される。この点を明確にするため、結果のフィードバックを受けた後に出された予測得点が試験前の予測得点に比してどのように変化したかを検討した。TABLE 5 に見るように、「低不安群」および「高不安群」の80%以上で実際の成績が予測を上回ったのに対し、「抑圧型」の半数以上で実際の成績が予測を下回っていた。負の結果のフィードバック条件では、「低不安群」および「高不安群」では全てが次の予測を下方修正したのに対し、「抑圧型」では、予測得点を修正しない場合が最も多く（例. 試験前予測：80点、試験成績：41点、次の予測：80点）、むしろ上方修正する場合さえあり（例. 試験前予測：60点、試験成績：56点、次の予測：70点）、下方修正したのは僅か1名であった。上記の推測を支持する結果であったといえる。

TABLE 5 各群の条件別該当人数 (人)

		予測得点の変化(試験前→試験後)				
			Up	Down	Even	計
予測得点から見た 試験成績の良悪 (予測得点→試験成績)	低不安群	negative	0(0.0)	8(12.9)	0(0.0)	8(12.9)
	(N=62)	positive	41(66.1)	1(1.6)	12(19.4)	54(87.1)
	高不安群	negative	0(0.0)	10(16.9)	0(0.0)	10(16.9)
	(N=59)	positive	37(62.7)	4(6.8)	8(13.6)	49(83.1)
	抑圧型	negative	3(16.7)	1(5.5)	7(38.9)	11(61.1)
	(N=18)	positive	7(38.9)	0(0.0)	0(0.0)	7(38.9)

括弧内は、群毎の各セルへの該当人数の%を示したものである。

次に、試験前になされた結果の良悪に関する見通しにおいて観察された「抑圧型」の一貫した楽観傾向は、負のフィードバックを受けた後でも維持されているだろうか。この点を検討するため、試験前とフィードバック後に被験者が行った評定から、悪い結果および良い結果を得る可能性についての判断の変化量を算出し、各変化量についてそれぞれ、群とフィードバック条件を被験者間要因、評価対象（自身、他者）を被験者内要因とする3要因の分散分析を行った。その結果、良悪いずれの判断の変化量においても主効果と交互作用は全て有意ではなく、こうした判断はフィードバックの正負に拘わらず変化しなかったことが示された。したがって、負の結果のフィードバックを受けた場合にも、「抑圧型」は依然として、悪い結果を得る可能性を低く、良い結果を得る可能性を高く見積もっていると推測される。なお、以後の分析ではフィードバック条件の正負に関して論ずる必要はないと判断し、群のみを被験者間要因としている。上記の推測について確認するため、フィードバック後に行われた各結果の可能性

の判断についてそれぞれ、群を被験者間要因、評価対象（自身、他者）を被験者内要因とする2要因の繰り返しのある分散分析を行った。その結果、良悪いずれの可能性判断においても、群（negative $F(2,136)=3.72$, n.s. ; positive $F(2,136)=.56$, n.s.）と評価対象（negative $F(1,136)=.00$, n.s. ; positive $F(1,136)=3.56$, n.s.）の主効果は得られなかったが、群×評価対象の交互作用は有意であった（negative $F(2,136)=13.91$, $p<.001$; positive $F(2,136)=16.57$, $p<.001$ ）。下位検定の結果、「抑圧型」は他2群に比して、自身が悪い結果を得る可能性を有意に低く、良い結果を得る可能性を有意に高く見積もっていることが示されたが、他者に対する評定に関しては有意な群間差は得られなかった。また、自身に対して行った評価と他者に対して行った評価との間でそれぞれ対応のあるt検定を実施したところ、「抑圧型」は他者に比して自身が良い結果を得る可能性を有意に高く（ $t(17)=3.69$, $p<.01$ ）、悪い結果を得る可能性を有意に低く見積もっており（ $t(17)=3.72$, $p<.01$ ）、依然として非現実的な楽観傾向を示すことが確認された。他方、「低不安群」（positive $t(61)=2.81$, $p<.01$; negative $t(61)=2.84$, $p<.01$ ）および「高不安群」（positive $t(58)=6.27$, $p<.001$; negative $t(58)=3.83$, $p<.001$ ）は、逆に悲観傾向を示した（TABLE 6）。

TABLE 6 成績フィードバック後における結果の見積もりの平均値

		低不安群	高不安群	抑圧型
negative	self	3.4(.45)	3.3(.66)	2.5(.50)
	other	2.9(.53)	2.9(.58)	3.1(.24)
positive	self	2.8(.58)	2.7(.62)	3.4(.51)
	other	3.2(.35)	3.3(.49)	3.0(.47)

以上、現実の試験場面を用いた本研究においても、「抑圧型」の非現実的な楽観傾向が一貫して観察された。また、「抑圧型」では負の結果のフィードバックが適切に評価されていない可能性が示唆された。「抑圧型」では、このように負の結果のフィードバック情報が無視されているため、研究1で示されたように、「理想」自己や「当為」自己のようなゴール表象と現実の自己表象との不一致率が小さいという結果が得られるのではないかと考えられる。なぜネガティブ・イベントが有効なフィードバック情報として機能しないのかに関しては、失敗体験を状況因に帰属するなどの帰属バイアスが関与している可能性もあるが、これについては今後の検討が必要である。

全体的考察

「抑圧型」は、状況の如何に拘わらず主観的な陰性情動は一貫して低い。本研究においても、特性不安尺度および抑うつ尺度の得点は「低不安群」以上に低く、これだけを見れば良好な適応状態にあると見なされ得る。しかし、ストレス負荷時の生理指標はむしろ高い陰性情動反応を示し、身体的には必ずしも健康とはいえないという矛盾を示す。従来から、主観的健康感や心理的適応に関する多くの研究は自己報告式の尺度に基づいた検討を行ってきたが、行動・生理指標を導入して得られた結果はそれまでの見解としばしば矛盾する。本研究の結果は、Taylor らが主張する「肯定的幻想」の効果についての見解は研究手法上のアーチファクトである可能性を示し、楽観傾向の問題点を指摘するものであった。

楽観傾向を問題視する研究では、非現実的な楽観傾向によって脅威の存在に対する適切な評価が妨げられ、状況に適切な対処方略の選択と修正が妨げられる可能性があることが指摘されている (e.g. Weinstein, 1982)。Taylor (1989) はこうした見解を否定してはいないが、「肯定的幻想」に見られる過度に肯定的なバイアスは、ストレスに対する緩衝となって当人の精神的健康を保つのみならず、ストレス事態においても自己効力感を維持し、より適切な対処行動をとることを可能にするため、身体的健康をも促進するだろうと主張している。両者の見解は、前者は楽観傾向が現実把握を妨げる危険性に、Taylor は現実把握の正確さよりも自己効力感の維持に果たす「肯定的幻想」の機能に焦点を当てている点で異なる。確かに、日常生活においてネガティブ・イベントに遭遇する機会は少なくなく、それによって一旦は陰性情動を体験するとしても、自己の肯定的側面をも想起し、そうした陰性の気分から回復できることは適応上重要なことである。実際、幾つかの研究によって、抑うつ者では、自己の肯定的側面が想起され得ないために抑うつ気分が維持されていることが示されている (e.g. 佐藤, 1999)。この点において、抑うつの緩衝要因として肯定的なバイアスを挙げる Taylor の指摘は評価できる。しかし、Taylor の主張では、ネガティブ・イベントによって一旦は陰性情動を体験した後にそこから立ち直れるタイプと、初めから陰性情動を体験できない可能性のある「抑圧型」のようなタイプとを区別しないままに、「肯定的幻想」の積極的な意味が論じられていることに問題がある。本研究にも示されるように、両者はその適応上の意味が

異なる。研究2に見るように、「抑圧型」では、負の結果のフィードバック情報が正当に評価されないために非現実的な楽観傾向が維持されている可能性が示されている。このため、状況に適切な対処方略が用いられず、思わぬ「不利益」を招いてしまう恐れがある。研究2における実際の試験成績の低さはその一例とも考えられるが、本邦においても健康面における影響が見出されるのか否かについては、「肯定的幻想」の影響を受ける主観報告ではなく、血中 IgM などの「客観的」な指標に基づく確認が今後必要である。

これまで、非現実的な楽観傾向には適応上の問題が伴う可能性について論じてきた。では、楽観傾向と適応との関係にはどのような限定を設けて考えればよいだろうか。本研究で、「真の低不安群」では、通常の授業時間というストレス負荷の低い状況ではネガティブ・イベントの可能性をやや低く見積もるという形で若干の楽観傾向が観察されたが、ポジティブ・イベントの可能性や自己表象に関しては楽観傾向が見出されず、また、現実の試験場面においてはむしろ悲観傾向を示した。このように、「真の低不安群」は、ストレス負荷の低い状況では、非現実的な楽観傾向を示す「抑圧型」と非現実的な悲観傾向を示す「高不安群」との中間に位置し、ストレス負荷の高い状況での反応はむしろ「高不安群」と近似するというように、状況に応じて異なる反応を示した。これに対し、「抑圧型」は肯定的な方向に、「高不安群」は否定的な方向に偏向し、ストレス負荷の如何に拘わらず、それぞれ一定した傾向を一貫して示している。こうした結果から、「真の適応」とは、状況に応じた適切な対応をなし得る認知構造の柔軟性にあるのではないかと予測される。しかし、本研究の結果が試験場面を越えて一般化し得るか否かについては、今後、数多くの場面を設定した研究によって確認していく必要がある。

引用文献

- Asendorpf, J.B., & Scherer, K.R. 1983 The discrepant repressor : Differentiation between low anxiety, high anxiety, and repression of anxiety by autonomic-facial-verbal patterns of behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 294-307.
- Brown, J.D. 1986 Evaluations of self and others : Self-enhancement biases in social judgments. *Social Cognition*, 4, 353-376.
- Cross, S.E., & Markus, H.R. 1999 The cultural

- constitution of personality. In L.A. Pervin & O.P. John (Eds.), *Handbook of Personality*. New York : Guilford Press. P.p.378—396.
- Crowne, D.P., & Marlowe, D.A. 1964 *The approval motive : Studies in evaluative dependence*. New York : Wiley.
- Davis, P.J. 1987 Repression and the inaccessibility of affective memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 585—593.
- Derakshan, N., & Eysenck, M.W. 1998 Working memory capacity in high trait-anxious and repressor groups. *Cognition and Emotion*, **12**, 697—713.
- 遠藤由美 1995 精神的健康の指標としての自己をめぐる議論 社会心理学研究, **11**, 134—144.
- 林 潔・瀧本孝雄 1991 Beck Depression Inventory (1978版)の検討とDepressionとSelf-efficacyとの関連についての考察 白梅学園短期大学紀要, **27**, 43—52.
- 林 文俊・堀内 孝 1997 自己認知の複雑性に関する研究 : Linville の指標をめぐる 心理学研究, **67**, 452—457.
- Higgins, E.T. 1987 Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, **94**, 319—340.
- Higgins, E.T., Klien, R., & Strauman, T. 1985 Self-concept discrepancy theory : A psychological model for distinguishing among different aspects of depression and anxiety. *Social Cognition*, **3**, 51—76.
- Jahoda, M 1958 *Current concepts of positive mental health*. New York : Basic Books.
- 神村栄一 1996 ストレス対処の個人差に関する臨床心理学的研究 風間書房
- Kneier, A.W., & Temoshok, L. 1984 Repressive coping reactions in patients with malignant melanoma as compared to cardiovascular disease patients. *Journal of Psychosomatic Research*, **28**, 145—155.
- LeDoux, J.E. 1996 *The emotional brain*. New York : Simon & Schuster.
- MacLeod, A.K. 1999 Prospective cognition. In T.Dalgleish & M.Power (Eds.), *Handbook of cognition and emotion*. New York : Wiley. P.p.267—280.
- Myers, L.B., & Brewin, C.R. 1996 Illusions of well-being and the repressive coping style. *British Journal of Social Psychology*, **35**, 443—457.
- 佐藤 徳 1999 自己表象の複雑性が抑鬱及びライフイベントに対する情緒反応に及ぼす緩衝効果について 教育心理学研究, **47**, 131—140.
- 佐藤 徳・安田朝子 1999 「抑圧」の認知精神病理学—情緒システムの機能的解離と身体疾患との関連について— 心理学評論, **42**, 438—465.
- 佐藤 徳・安田朝子・吉村 聡 1998 Marlowe-Crowne 尺度日本語版の作成と尺度の意味について 早稲田心理学年報, **30**, 9—17.
- Schedler, J., Mayman, M., & Manis, M. 1993 The illusion of mental health. *American Psychologist*, **48**, 1117—1131.
- 清水秀美・今栄国晴 1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版(大学生用)の作成 教育心理学研究, **29**, 62—67.
- Schwartz, G.E. 1990 Psychobiology of repression and health : A systems approach. In J.L.Singer (Ed.), *Repression and dissociation*. Chicago : The University of Chicago Press. Pp.337—386.
- Taylor, J.A. 1953 A personality scale of manifest anxiety. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **48**, 285—290.
- Taylor, S.E. 1989 *Positive illusions : Creative self-deception and the healthy mind*. New York : Basic Books.
- Taylor, S.E., & Brown, J.D. 1988 Illusion of well-being : A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193—210.
- Taylor, S.E., & Brown, J.D. 1994 “Illusion” of mental health does not explain positive illusions. *American Psychologist*, **49**, 972—973.
- Taylor, S.E., Kemeny, M.E., Aspinwall, S.G., Schneider, S.G., Rodriguez, R., & Herbert, M. 1992 Optimism, coping, psychological distress, and high-risk sexual behavior among men at risk for acquired immunodeficiency syndrome (AIDS). *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 460—473.
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1993 オプティミストは健康か? 健康心理学研究, **6**, 1—11.

- Tversky, A., & Kahneman, D. 1973 Availability: A heuristic for judging frequency and probability. *Cognitive Psychology*, 5, 207—232.
- Ward, S.E., Leventhal, H., & Love, R. 1988 Repression revised : Tactics used in coping with a severe health threat. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 14, 735—746.
- Weinberger, D.A. 1990 The construct validity of the repressive coping style. In J.L.Singer (Ed.), *Repression and dissociation*. Chicago : The University of Chicago Press. Pp.337—386.
- Weinberger, D.A., Schwartz, G.E., & Davidson, R.J. 1979 Low-anxious, high-anxious, and repressive coping styles : Psychometric patterns and behavioral and physiological responses to stress. *Journal of Abnormal Psychology*, 88, 369—380.
- Weinstein, N.D. 1980 Unrealistic optimism about future life events. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 806—820.
- Weinstein, N.D. 1982 Unrealistic optimism about susceptibility to health problems. *Journal of Behavioral Medicine*, 5, 441—460.
- (1999.7.5 受稿, 2000.1.20 受理)

Is Unrealistic Optimism Really Adaptive ? : A Negative Aspect of Repressors' Optimism

ASAKO YASUDA (WASEDA UNIVERSITY) AND ATSUSHI SATO (THE JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE, WASEDA UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2000, 48, 203—214

Although it has been proposed that self-serving bias must be adaptive, this may be explained by the contribution of subgroups of extremely positive individuals like repressors, who score low on the STAI and high on the Marlowe-Crowne scale. On the other hand, low-anxious individuals score low on both scales. Participants in the present research were adults. In Study 1, repressors exhibited tendencies of overly positive self-evaluation and unrealistic optimism, but low-anxious participants were not as optimistic. Repressors also showed only small discrepancies between their “actual self” and their goals, which could explain their low distress. In Study 2, repressors had unrealistically optimistic expectations about real-life examinations, and their results were worse than they had expected. Moreover, when that happened, repressors did not lower their expectations about the next examination, or even modified them to be more optimistic. These results suggest that repressors exhibit unrealistic optimism not because the discrepancy between their actual self and their goals is really small, but because they neglect negative feedback information about the present situation. Is unrealistic optimism “truly” adaptive ? The present studies suggest that the answer is “no”.

Key Words : anxiety, positive illusion, repressor, self-serving bias, unrealistic optimism